

表象文化(中ザワヒデキ)

学籍番号：11aa014t

氏名：水野佑里子

公開について：公開可

《「新・方法」講義立会記》

「方法主義」から生まれた「新・方法主義」。第一宣言では、 $A=B$ 、 $B=C$ 、 $C=A$ という形で、第二宣言では $A=A$ 、 $B=B$ 、 $C=C$ である。分かりやすいようで、些か理解に苦しみつつの講義。定時に鳴り響く鳩時計。芸術という面での新しい形。一般的に芸術と呼ばれるものとは全くもって異なるものに、不安が私自身を被う。形があつて形がないもの、そこに在って存在しており尚且存在しているようでしてないもの、しかしそこには「新・方法」という形がある。それが「新・方法」という芸術において、私の大半を占めているものである。

さて、「新・方法主義」についてであるが、同語反復についての話をする。同じ言葉を繰り返し一つの作品とする。 $A=A$ 、 $B=B$ 、 $C=C$ という形が表れているのではないだろうか。しかしながらこれを耳にし、同じ言葉要するに「同語」を「反復」することによっての効果とは一体何なのであろうか。人間の耳は同じ言葉を脳内に取り込むことで、その言葉が脳内に残り、回るだろう。そこが狙いなのではないだろうか。ここに「新・方法」のエッセンスを見出したのである。

例えば作品の一つである「記念祝賀会」という言葉の無限ループ。ループ。ループ。同語反復。反復。反復。反復。反復。反復。このように文字で連ねてみたが、新・方法とはこういうモノなのであろうか。解明しようとは思わない、理解しきろうとは思わない、何かを探そうと考えてみよう、芸術を疑問視しながらこっそりと覗いてみよう。このようなスタンスで臨めば「新・方法」についてなにか見えるのではないだろうか。そう思い臨んだ講義、そして講義の延長戦。結局私自身の脳内は青く海のように染まってしまったのであろうか。ラッセンという作品に思想的な反逆を起こせばいいのだろうかという思考さえも最早洗脳されているのではないかと考える日々である。